

はじめの 万葉集

vol. 19

日本に現存する最古の和歌集『万葉集』をわかりやすく紹介します。

引手の山

ひきて

この歌は、柿本人麻呂が妻を亡くした後に涙を流し嘆き悲しんで詠んだとされる歌群のなかの一首です。山に葬られた妻のことを思いながら、呆然と山道を歩く男性の姿が目につかぶようです。

長歌には、彼女が幼い子供を置いて亡くなったことが描かれています。また、直前の短歌では、去年二緒に眺めた秋の月が今年も同じように照っているけれど、彼女だけがここにいない、とこれからもずっと続く妻の不在を、美しい表現で嘆いて

「引手の山」とは耳慣れない地名ですが、衾田陵（西殿塚古墳）のあ

衾道を引手の山に

妹を置ききて

山路を行けば

生けりともなし

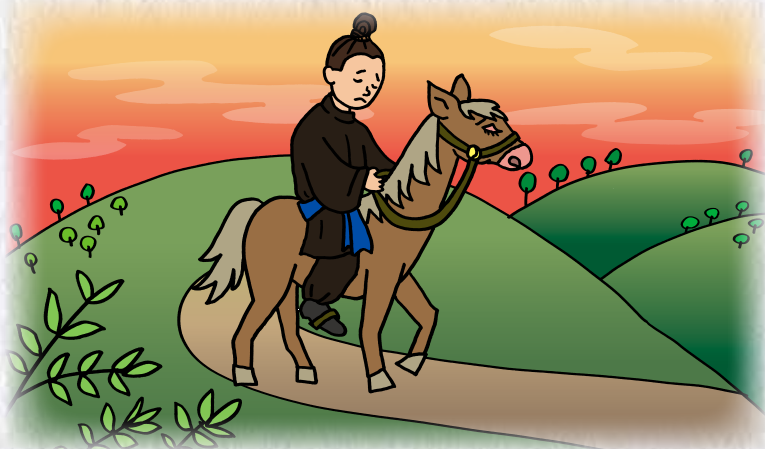
柿本人麻呂（巻2 二二二番歌）

（訳）衾道よ、引手の山中に妹をおいて山道をたざると、生きた心地もない。

る天理市中山町の道を「衾道」と呼んだ可能性が指摘されています。そして「引手の山」とは、長歌に「羽交の山」とも詠まれた竜王山を指すとみられています。

「衾」とは、和室の仕切りに使う建具の「襖」でも、小麦を粉にひいたあとに残る皮の部分の「麩」でもなく、寝る時にかかるの長方形の寝具のことをいいます。麻や紙などの素材で作られていたといい、袖や襟を付けた形のものもありました。平安時代頃まで用いられていたという古典的な寝具ですが、使い方が同じ後世の掛け布団も「衾」と呼ぶことがあるようです。

この歌では、そうした「衾」を名に持つ「道」が詠まれ、「引手の山」という地名に続いています。寝具の「衾」は「引」き寄せて寝ることか



山の辺の道

万葉ちゃんの
スポット
紹介

万葉ちゃんの
スポット
紹介



万葉ちゃん

日本最古の道と言われる山の辺の道。いにしえの人々が行き交ったこの道は、今も「記紀・万葉集」ゆかりの地名や伝説が残り、数多くの史跡に出会え、訪れる人を「古代ロマンの世界」へと誘います。



檜原神社付近の道標

山の辺の道ウォーキングマップは
歩く・なら 山の辺の道 検索

アクセス

JR・近鉄天理駅下車(約16kmのコース)

